

小説「国宝」について

2026年3月27日

担当 瀬川隆二 (S47 法)

2025年6月封切の映画「国宝」は主演（吉沢亮）と助演（横浜流星）の演技と踊り、監督（李相日）の手腕そして脚本・カメラワークの素晴らしさで歴史的ヒットが続き22年振りに実写観客動員数を更新し、日本アカデミー賞をほぼ独占しました。

私は、昨年9月に映画を見て映像美と面白さに魅かれ、原作の小説「国宝」を読んだところ、その内容・スケールが映画を超えていたことから、3月読書会のテキストとして取り上げました。

著者（吉田修一・1968年生れ）は1997年作家デビュー、2002年「パーク・ライフ」で芥川賞受賞後は「悪人」や「怒り」等の作品（この2作は李相日により映画化されいずれも日本アカデミー賞最優秀作品賞を獲得）などが評判となり、2016年には芥川賞の選考委員に就任しています。

この小説は、2014年に李相日が歌舞伎に係わる映画を撮りたいという話を聞き、中村鴈治郎（映画にも出演している歌舞伎役者）の伝手で、歌舞伎座・松竹座などで黒衣を纏っての3年間の楽屋取材を踏まえ、朝日新聞に2019年から連載されました。

この小説の特色は、歌舞伎の血筋でない任侠の子（喜久雄）が国宝に上り詰める生涯を、歌舞伎の演目に沿って語っていく所にあって、歌舞伎と縁がなかった私にとって、演じられる歌舞伎の演目ごとにその歴史や内容を分かりやすく説明しながら話が展開し、歌舞伎解説書としても演目の選択が心憎く感じました。

（小説で取り上げられた演目について）

演目を小説に沿って簡記しますと、14歳の喜久雄が雪の長崎の料亭で演じる「積恋雪関扉」（以下斜体が演目）から始まり、大阪の花井半二郎に引き取られ実子の俊介と稽古に励み「隅田川」で歌舞伎に目覚め、17歳「二人道成寺」で人気化、半次郎に指名された「曽根崎心中」で揺ぎないものとなる。（俊介出奔）

「菅原伝授手習鑑」を演じた半二郎は吐血、病床にて「仮名手本忠臣蔵四段目」を語ったのちに死す。後ろ盾を失った喜久雄はドサ回り先で「藤娘」を踊る。一方、出奔した俊介は「二人道成寺」で復帰。

復帰した喜久雄は「本朝二十四孝」で俊介と共に芸術選奨を受賞、パリのオペラ座で「鶯娘」を踊る。バブル期は「源氏物語」「国性爺合戦」など全国公演。絶頂期「阿古屋」から精神の変調が始まる。

喜久雄は共演中の「隅田川」で俊介が倒れ「鹿子娘道成寺」劇中に俊介の死を聞く。身内の不孝が続く中で「沓手鳥孤城落月」「藤娘」「女殺油地獄」「祇園祭礼信仰記」などを演じ、そして歌舞伎座で「阿古屋」を演じている中で、文化庁からの国宝認定の通知が出て、ラストは雪景色の銀座をさまよう。

小説で扱われた歌舞伎の演目を順番にざっと紹介しましたが、作中の演目紹介の語り口がいかにも歌舞伎調であることが印象に残りました。そして事前準備と現場取材の成果が各所に出ていると感じました。

(映画と小説の違いについて)

映画には時間的制限があるので、内容を省略せざるを得ず、小説での登場人物・出番などが大幅にカットされています。そして小説では、喜久雄を中心に様々な人々との係わりで物語が展開しましたが、映画では喜久雄と俊介の二人の係わりに絞って描かれています。

俊介と並ぶ役割で最後まで小説を盛り上げた徳治の出番は最初の長崎で終わり、芸者に産ませた綾乃との係わり、喜久雄を支えたコメディアンの方天、父を殺した辻村などは全く出てきません。

喜久雄と俊介の子供達の扱いも省略されていますが、それでも小説では横綱の女将となった綾乃は映画のラストでカメラマンとなって「喜久雄と悪魔との取引」を述べています。死んだ俊介の長男豊生、喜久雄が鍛えた次男一豊のひき逃げ事故なども省略されています。

映画では不祥事で歌舞伎界を出された喜久雄・彰子は、出奔した俊介・春代と同じく地方ドサ回りを経験しますが、小説では新派に移籍してパリ・オペラ座で公演するなど、スケールの大きさが段違いです。

私の映画での記憶では歌舞伎の演目も小説と異なっています。映画で壮絶だった俊介最後の舞台「曾根崎心中」は小説では「隅田川」でした。曾根崎心中はかつて喜久雄が半二郎の代役を務めた演目で、同じ演目で役を変えて見せる方が、やはり映画として面白く見せていると思いました。

喜久雄と俊介が抜擢される四国金毘羅と続く京都南座での演目について、小説では同じ「二人道成寺」を映画では金毘羅は「藤娘」でした。同じ演目を避けたと思います。そして映画での最後は「阿古屋」でなく「鷺娘」でした。(舞台で舞い散る鷺の白い羽と雪を、小説での銀座に降る雪に見立てたと思います)

(最後に)

小説は、先述の通り歌舞伎解説書としての評価もさることながら、濃密な人物描写と読者の心をそらさぬ話の展開・面白さで、一気に歌舞伎の世界に引き込む魅力がありました。

映画は、2度も吉田小説の映画化を果たした監督(李相日)の力量、原作をきっちりまとめ上げた脚本、吉沢亮と横浜流星を支える脇役陣、そして歌舞伎の世界を華麗に映像化したカメラワークなどが加わって、日本映画界の歴史に残る作品となったと思います。

ともかく、小説・映画ともに最高傑作でした。作者・映画監督の二人ともまだ若く、将来が楽しみです。

以上